

教員養成教材としての英語文学 —序にかえて、ジョイスの「下宿屋」を読む

Literature in English as Teacher-Training Material: An Introductory Case Study on James Joyce's
"The Boarding House"

宮原一成*

Abstract

This paper forms part of a larger study proposing to introduce seminars/classes on literature in English to the teacher-training curriculum in Japan. The study of literature has been considered a critical component of medical education since the early 1970s. The exemplary models for the larger study include pedagogical principles and methodology developed in the discipline of literature and medicine (later integrated into the purview of medical humanities). Making adaptive use of these frameworks, this study advocates the utilization of literature in English in the teacher-training courses in Japan. It contends that the use of literary texts in English can facilitate more holistic learning and teach prospective teachers several requisite skills—especially those applicable to student-guidance in elementary and secondary schools—in a quasi-experiential fashion.

The present paper first reviews the five methodological principles for teaching literature in medical training courses in the US and the UK: ethical, aesthetic, empathetic, "safe," and "uncertainty." Next, it offers a tentative list of policies for the selection of literary works for the proposed "literature for prospective teachers" courses. Finally, it carries out a brief and demonstrative case study in which James Joyce's short story "The Boarding House" will be read through a deliberately empathetic approach.

キーワード：英語文学教材、医学教育と文学、教員養成

本稿のタイトルにある「序」という言葉が示すとおり、この論文はある大きな研究プロジェクトの序説と位置づけられる。その大きな研究とは、教員を志望しその養成課程に身を置く学生にとって、英語で書かれた文学作品が、教員という職業の本質的部分に関わる技能、特に生徒指導や学級運営に関する技能を磨く教材として効果的に機能することを提案し、その具体例を蓄積するというものだ。なお、英語文学を教育に活用するという提案ではあるが、英語学習教材としての有効性に関する議論とは一線を画するものになる。

本研究の着想にいたるきっかけのひとつは、医学生教育において文学作品を活用するという実践が英米で見せている活況ぶりである。Anne Whiteheadによれば、文学を医学生教育に採り入れる実践はア

メリカでは1970年代に始まり、¹⁾イギリスではやや遅れて1990年代に火が付いたという (Whitehead 108)。1998年にはアメリカの全医学部の74%において文学の授業が組み込まれるようになっており、そのうち39%が文学を必修科目としていたと報告されている (Charon 23)。

教育の内容面に目を向けてみよう。1995年に Kathryn Montgomery Hunter と Rita Charon そして John L. Coulehan がアメリカにおける literature and medicine 教育の来し方を概観した共著記事によれば、この教育はまず、William Carlos Williams のような医療従事経験者が患者や病について書き綴った文学作品を用いつつ、若い学生に病気や障害や死などについて教えるというところから始まった。医学と文学のあいだには "natural affinity" が

* Kazunari MIYAHARA 教育学部教授

あると明快に主張した Edmund D. Pellegrino によれば、1982年時点の医学教育の状況を次のようなものになっていた。

In a dozen medical schools, courses in literature are serving several goals in unique ways: teaching empathy with the ill person, giving insight into the peculiarities of the medical life and the doctor's place in society and culture, underscoring the dilemmas of medical morals, and improving the use of narrative forms in history taking. (quoted in Jones 419)

やがて “the interpretive parallels between acts of reading and acts of diagnosis” がもっと注目されるようになり (Hunter, et al. 788)、そこから、文学部などで実践される文学演習とはやや異なる独自のアプローチ、すなわち “the explicit exploration of the readers' own associations and emotional responses called forth by the text” (790) という教育原理やメソッドが確立されていったのである。²⁾

当該分野ではよく知られているように、文学の効能を医学教育に活かす方法として、Anne Hudson Jones は1990年にふたつのアプローチを提唱した。すなわち、生命倫理観育成という “the ethical approach” と、正しい診断につながる解釈力を養う “the aesthetic approach” である。これらはいまでもこの分野の基本原則とされている。そして John Coulehan が1995年に、“the empathetic approach” — “which aims to enhance the student's ability to understand the experiences, feelings, and values of other persons” — を追加した (Hunter et al. 789)。これもまた、医学における文学の大きな効能に着目したアプローチとして非常に尊重されている。Pellegrino はこれらの三本柱を先取りしていたと言っている。

追加された第3点の “the empathetic approach” は、その後いよいよ重視されていく。2009年、アメリカの Martyn Evans は、文学をはじめとする人文諸分野は、医師と患者の人生という別々の “two tracks” が交流し相互理解に至る道筋を例示し把握させてくれる、と論じた (Evans 18)。英国 University of Nottingham で精力的な活動をしている Health Humanities 研究センターの主宰者のひとり、Paul Crawford が共編著として2015年に出版した *Health Humanities* には、医学教育に文学を活

用することについて、次のような趣旨説明が載っているが、ここでも共感力は大きくクローズアップされている。

One reason for immersion in literature is the opportunity to see inside or encounter something different, peculiar, as escapism or to gain a sense of something new, to learn or to develop empathy. [...] Using literature to reflectively explore the subjective experiences of a range of people, attitudes, judgements witnessed in clinical placements, particular diagnoses, effective (and ineffective) reactions and responses that people have previously encountered, highlights the uniqueness and individuality of personal journeys. This in turn counterbalances the homogenising potential of symptomatological and diagnostic formulation. [...] Reflection through narratives also enables exploration of potentially challenging personal emotional responses and values through a safe medium. (Crawford, et al. 48, 51)

上の引用の最後には、もうひとつ新しい効能への言及が見える。それは、文学が「安全な safe」教育メディアであるという点だ。あとで論じるように、これもまた蔑ろにできない効能として本稿が注目を寄せている観点である。

こうして三本柱が四本柱になったわけだが、文学が教材として備えているこうした利点は、医学教育にのみ貢献する性質のものではない。たとえば、何の教科であれ、多人種多文化で構成されるクラスで教鞭を執る教師にとって、文学を利用することがきわめて有益であることは、Johanna Pentikäinen の研究などによって検証されている。多様な視点を内包するフィクションを読むことが、多文化主義に関する感性を涵養するからである。この Pentikäinen は、文学教材の効果として、多文化主義的感性の育成以外にも数点を列挙しているが、そのほとんどは Crawford らが着眼した点と重なっている — “stimulus for analysis and reflection [...] inviting the reader to [...] extrapolate differing solutions”、そして “it enables the reader to identify with the lives of characters whose lives may differ greatly from his or her own” であり、“using literature, one can discuss challenging issues ‘out in the text’, without making

direct or explicit reference to real life” (Pentikäinen 191)。

言わずもがなだが、これは文学教材が、医師養成教育や異文化主義教育に限らない汎用性を持つことを示している。医学教育における文学の効能を並べてくれる強力な主張のなかで使われている「医師」という語を「教師」に置き換え、「患者」という語を「生徒」に置き換えてみても、この文章の主張はそのまま成立する——そのことは、ほぼ直感的に了解されるだろう。

医師と患者の関係や、兆候の見極めと診断といった行為と、教師と生徒の関係や学習指導・生活指導において個々の生徒が抱える私的・社会的問題の背景を把握するという行為。二者をそっくりそのまま同一視することには、一定の用心は確かに必要だ。しかし、かなりのところまでは類推が可能だと見なしてもよいように思われる。文学を通し、そして文学を批評的に読むというディシプリンについて一定の修練を経ることによって、生徒がたどってきた「個人的な経歴の独自性・個別性」をしっかり意識しながら、複雑な現実が突きつけてくる新しい発見に備えつつ、「共感」するすべを身につける。

しかも——これは本稿が強調したい点だ——生身の個人と直接向き合って実地訓練する代わりに、書かれたテキストという「安全な媒体を通して through a safe medium」模擬訓練を課す。もしも失敗したとしても、自分や他人に直接的な実害を与えたり身につまされる思いをもたらしたりする懸念が回避できるわけだ。それは、教員養成の場においても有効な学習手段となりうるだろう。これは、たとえば“indirect approach”あるいは“safe approach”などの名称を与えてでも、特筆したい実践面の特徴であろう。

さらに、“the aesthetic approach”に包含される解釈力養成という面に関しても、特に注目しておくべき点がある。いったい解釈の試みというものは、快刀乱麻のようなかたちで実現することはほとんどない。正解が用意されていない現実のなかで手探りしながら模索を続ける、というのが、解釈行為の本質である。表象物の理解にしても、また他者が持つ価値観への共感や倫理にしても、それはたいていの場合、一元的な形をとってくれない。すぐには正解が出せず的確な判断が下せないような曖昧な状況で

もそれを受け止める、という受容的態度が必要だ。それを育てるには、多様な価値観が交錯し、それらの優劣判断について保留の態度をとったまま終わることが多い文学作品が役に立つのである。

Crawford らは、Charon の著書 *Narrative Medicine* (2006) における議論を紹介しながら、医学生が身につけるべきコミュニケーション技能の一端——“the skills of respecting multiple perspectives, hearing mediating competing voices, and recognizing and paying heed to a multitude of contradictory sources of authority”——とし、その習得には、文学研究の観点が効果的に機能すると論じている (Crawford, et al. 53-54)。Alan Bleakley も、2015年の著書において、文学を含む人文学が、曖昧な状況に対する耐性・受容的態度の涵養という点で医師養成教育に裨益すると主張している。人文学が扱う芸術には、“Where medicine aims to maintain bodily homeostasis or internal regulation and balance, working against illness and towards health and wellbeing, the progressive arts can be seen to upset cultural homeostasis to induce a permanent state of questioning of what constitutes cultural ‘health’ and ‘wellbeing’” (Bleakley 210) という対照的あるいは補完的性質があるからだ。伝統的な医学教育には欠けていたこの方面の教育が、人文学に期待できると Bleakley は明言している。

Although medical and surgical practices were riddled with uncertainty, the profession, especially surgery, refused to acknowledge such uncertainty. Indeed, the medical historian Kenneth Ludmerer [...] describes a “century-long defect in medical education: the failure of medical education to prepare learners to deal with uncertainty”. One of the major turns in contemporary medicine and medical education is the growing recognition by the profession to admit to high levels of ambiguity and uncertainty and to share this openly with patients and colleagues. [...] The medical humanities can play a vital role in giving meaning to such ambiguity in medicine. (Bleakley 211)

そう指摘したうえで Bleakley は、曖昧さを受忍する姿勢の涵養における人文学の役割を4つ挙げて

いる。少々ことばを足しながら紹介しよう——1. 「医療とは単純明快なものではないという現実を直視する姿勢を養うこと」、2. 「医師が権威主義的な (authoritarian) な姿勢に陥るのを抑制すること」、3. 「患者も一緒に協力して治療にかかわることを望んでいるのを知ること」、そして4. 「医療においてミスは生じるものだとすることを謙虚に認める姿勢を持つこと」(see Bleakley 211-12)。このように、解釈行為において曖昧さ・不確定要素を念頭に置き、これを受容するという訓練——“not so much to consistently ‘resolve’ it [ambiguity] as to take ambiguity into account in its understanding” (Hester, et al. 101) ——は、医療者という職業においてきわめて実際的な価値を持つ教育内容なのだ。

文学を英語学習教材として活用することを主張する研究者にもしばしば目を向けてみよう。言うまでもなく、彼らもこの「曖昧さ」の効能には気づいている。たとえば丸川桂子は1995年に、Christopher J. Brumfit や Ronald Carter の議論を土台にしつつ、文学を語学学習教材として「復権」させるため5つの根拠を挙げており、その5項目はいまでも文学教材擁護派の大方の意見を代表しているように思われるのだが、その第5項目が、「全人教育になる。〔中略〕また、文学テキストの意味は一義的ではないから、柔軟な思考、寛容な態度を育てるのに役立つ」(丸川 205) となっている。全く異論はないのだが、医療者育成という職業教育においては、曖昧さへの耐性を教えることが、「全人教育」というようなややぼんやりした目標ではなく、輪郭のくっきりした目標に向かっていくことには留意したい。

そしてそれは、教育者という職業においても、同様に実際的かつ明瞭かつ肝要な意義を持つ教育内容になると言っていいたい。文学の「曖昧さ」がもたらすこの4つの役割を教員養成課程においても期待することは、決して見当違いなことではないはずだ。よって本稿ではこの側面を“the aesthetic approach”から独立させ、暫定的に“the uncertainty approach”という固有の呼称を与えることにしたい。

教師には、児童生徒の学力診断のみならず生活面に対して、ある意味で医師のような役割を果たすことが求められる。この状況について述べるに際しては、「遺憾ながら」という前置きを添えるべきだっ

たかもしれない。日本以外の国であるなら、教師が生徒の状況を把握し「診断」といった場合、その「診断」は教科の学習行動に直接かかわる要素にほぼ限定されるからだ。たとえばドイツで編集された *Teacher's Professional Development: Assessment, Training, and Learning* には、“Training Prospective Teachers in Educational Diagnostics” (Monika Trittel, Mara Gerich, Bernhard Schmitz の共同執筆) という章があるのだが、そこで言う「教育診断学」の対象に含まれるのは、生徒の“learning behavior”や“students' academic growth and their growth in using learning strategies” (63) にかかわる部分だけなのである。教科指導のみならず生徒の家庭環境や精神世界についての洞察と対応までを、専門家ではなく個々の担任教師に要求し、そのため生徒指導が「教育相談との乖離」(藤井 21) をきたし、ここの教師に多大な負担をかけてしまう苛酷な状況は、決して万国共通のものではない。

日本でも昨今は「チーム学校」などといった概念も出現してはいる。それでもやはり日本の教師は、「いじめ・不登校などの生徒指導上の課題や貧困・児童虐待などの課題を抱えた家庭への対応、キャリア教育・進路指導への対応、保護者や地域との協力関係の構築など、従来指摘されている課題に加え、〔中略〕道徳教育の充実、〔中略〕インクルーシブ教育システムの構築の理念を踏まえた、発達障害を含む特別な支援を必要とする児童生徒等への対応、学校安全への対応、幼小接続をはじめとした学校間連携等への対応」(中央教育審議会 9-10) などの課題に対応するための、ワンストップのゲートキーパーという位置づけを与えられている。賛否はあれ、それが現状なのである。

その現状が変わるまでは、教師には上記のような諸対応力が期待され続けるだろう。30有余年のあいだ中学校教師として「生徒指導畑を歩んできた」経歴を持つ山口健一は、2018年の論考で「社会が大きく変化していく中で、さまざまな課題や要求に対応していかななくてはならない学校現場は、即戦力を求めている。教壇に立つ前に、トイレ掃除の方法を知っている教師を、中学生と接する感性を身に付けている教師を配置してほしいというのが、学校現場の正直な気持ちである」(山口 49) と述べている。偽らざる実態であろう。山口と同様に、長い教師生活のなか生徒指導に携わったという藤井雅英は、生

徒指導という教育活動には、現実として、「不登校やいじめ、非行など」といった「今日の状況や児童生徒の実態を踏まえた予防的な取組や問題解決的な関わりも必要不可欠」としている（藤井 21）。そして、生徒指導にあたる教職員に必要な能力や姿勢とは、「肯定的な児童生徒観に立脚した共感的な態度や尊重の姿勢〔中略〕また、児童生徒の置かれている実態や発達の在り方〔中略〕の個性や多様性を尊重する姿勢とともに、様々な資料を活用したり、丁寧な観察を通じて必要な情報を収集し、その情報を知識や理論などに照らして分析し、一人一人、あるいは子ども集団の状態や心理を理解し、ニーズを特定する能力」だとまとめている（藤井 22）。また梨木昭平は、「学級担任としては『養護教諭』や『生活指導』等自分とは生徒の観点が異なるような立場の同僚と調整するようなことがしばしば必要で〔中略〕当該の生徒からの視点も含め、他者からの視点を想像することは教職志望者にとって大切な技能である」（梨木 265）と指摘している。共感的姿勢と多様性への目配りもまた、強く要請される資質ということになる。

つまり、医学生や医療者に求められるホリスティックな「患者理解」技能にかなり共通する諸能力や感性、姿勢を習得することが、日本の教員志望者にとっては大きな要請になっているのである。教育や子育ての領域において、日本の教師には、一般開業医、とくにかかりつけ医のように、当該領域に関連するあらゆる諸問題を一括してとりあえず受け付ける総合窓口という役割が——遺憾ながら——期待されている。その現状を考えると、教員養成課程においてこうした技能の習得を目指すにあたっては、医学教育の世界でも既に成果をあげている文学研究のアプローチという方法論を用いることが、大きく貢献してくれることだろう。

本稿および本稿の筆者がもくろむ研究は、そのような文学を日本の教職課程に教材として持ち込むことを提案するものだが、これには先達が存在する。そのひとりが先ほど名前を出した梨木である。梨木は2009年の論考で、文学の「意味を求める働き」と「想像を促進する働き（特に「他者からの視点を想像する」ことを促進する働き）」に期待して、教職志望者にとっての必修科目である「教職概論」が文学を教材とすることを、自身の実践例に基づいて提

案した。この実践例で興味深いのは、夏目漱石の『坊っちゃん』など、教師を主人公にした小説やドラマなどを讀んだり観たりした感想を問う活動だけでなく、「小・中・高等学校の自分自身の教育史」を書かせる文学的創作活動を一部採り入れた点である。米国の *medical humanities* においては、文学を取り込む実践が、文学の読解ではなく創作活動のほうへ重心を移しつつある。梨木の関心や実践は米国における医学教育の最近の動勢と同じ方向に向かっているわけだ。また梨木は2010年の論文では、小林剛の提案する「『子どもの論理』に立つ」臨床教育学という考え方に共鳴し、そして、河合隼雄の提案した「葛藤場面」がうまく書かれた児童文学の名作を讀んで聞かせて「もし自分が主人公の状況にあったらそのような行動をするだろうか」と考えさせるという教育活動の方法論に則って、「生徒指導論」や「進路指導論」における文学教材の活用を唱えている（梨木「教職科目」14, 16, 23）。

範としたい提唱だが、惜しむらくは、文学もしくは文学的アプローチに関する理解が皮相的なレベルにとどまっているような印象がある。梨木はある学生の文学活動の成果として、生徒につらく当たる教員について書かれた文章をとりあげる。そしてその事例を、教職志望者が「克服したい課題」である「反面教師」像と位置づけるだけで済ませている（梨木「教職概論」267-68）。多様な視点の存在を想像できるようにするための「文学」利用としては、少々物足りなく感じられる。主人公とその敵対者や傍観者など、さまざまな人間の視点を提示し絡み合わせることは、文学の本領のひとつである。作品をうまく選べば、読解の作業だけでもそうした洞察へと学生を導くことが可能だっただろう。「反面教師」とされている当該の教員が持つ視点やその教員の境遇にまで踏み込む洞察を誘うことができれば、多様な視点への配慮がさらに深まったのではないか。

たとえば、英国で2019年に英国最大の文学賞ブッカー賞を獲得した現代小説 *Girl, Woman, Other* (Bernardine Evaristo 著) を教材として使ったなら、鼻つまみ者教師の無情な個人指導に渋々耐える生徒 Carole の視点から描かれる物語と、「反面教師」的なその教師 Shirley 側の視点で、Shirley が味わってきた苦闘と挫折の人生と、彼女が次世代に対して抱く屈折した期待を併せて体験することができるだろう。こうしたマルチな視点で書かれた小説を讀

み、異なる視点を突き合わせていく活動には、大きな効能を挙げる可能性があるはずだ。

言うまでもなく、同じように多様な視点で書かれた小説は日本にも数多い。だが、本研究はあえて、英語で書かれた文学作品を教材にすることを提案したいと考えている。先に見た Pentikäinen があげた “discuss challenging issues ‘out in the text’” を文学は可能にするという議論、あるいは Crawfordらの言葉で言えば “a safe medium” としての文学の利用価値の議論を想起していただきたい。現実社会の中で生じている “challenging issues” に関する議論を、実生活から距離をとった安全な立場から、だが “emotionally” に関与することは実現しながら、執り行うことができる。それが文学の教材的効能だと述べられていた。本研究にとってこれは非常に大事な指摘である。教職を志望する日本の大半の学生にとって、英語という外国語で書かれた文学は、日本語で綴られた文学以上に「安全」な教材となるからだ。「反面教師」などのデリケートな問題を論じるには、十分に「安全」な距離——たとえば日本の教室でナイジェリア系英国人という異文化の話を読む、というような距離——をとる配慮をするほうが、それだけ妙な忖度や遠慮の余地を減らすことになるだろう。

教職課程用の英語文学作品を選定する際の具体的な条件について、ここで暫定的に整理しておこう。とりあえず次のような項目をあげることができそう

- (1) 登場人物の個人生活が、一定の外的条件（社会面、文化面あるいは健康面などの条件）に影響を受けているという設定で書かれている作品。倫理的 (ethical) 側面もさることながら、共感的 (empathetic) 態度につながる糸口を積極的に模索する姿勢を涵養するのに寄与する作品ということだ。
- (2) 作品構造がありきたりでなく、解釈において複数の可能性を含んでおり、何らかの手がかりを元にして謎解きや意外な発見の楽しみを誘う書き方がされている作品。これは主に審美的 (aesthetic) 側面に関する条件であるが、多様性に起因する曖昧さ (uncertainty) をたたえているという性質を重視した条件設定でもある。さらには(1)で述べた、共感の糸口を探る面

とも深く関係していることは言うまでもない。

- (3) 日本の大学で教職課程を履修している学生という受講生の境遇と、適度な距離のある世界を扱った作品。これは、安全な (safe) 教材という面にかかわる条件である。たとえば、登場人物の年齢を考慮して作品選定する際、生徒児童と同年齢のものにするか受講生自身あるいは保護者や児童生徒の家族の年齢に近いものを選ぶ、というのは、妥当な選択といえよう。一方で、受講生があまり身につまされるような身近な物語は避けるという判断もあっていいだろう。
- (4) 中学生・高校生レベルに限定されない、大学生の知的レベルに応えられる程度の英語難易度および文章読解難易度を持つ作品。これは審美的側面の一部である知的関心という面に配慮した条件であるが、一方で条件緩和とも言えるだろう。英語初学者向けの手心を加えた retold 版を使うことなく、原文を使用できるというのだから。ただし、語学力向上を狙わないのだから英語で読ませる必要もないのかもしれない。邦訳書の利用も許可し、解釈の勘所になる部分のみを英文あるいは日英対訳形式で示す、というやり方も、受講生の語学レベルに応じて採用されていい。

先に述べたように、このリストはまだ暫定的なものである。今後さらに精緻な考察に基づく改良が必要であることは言うまでもない。

ではここからは、具体的に1つの作品を挙げ、それに教員養成教材としてどうアプローチできるかという可能性を、ケーススタディ的に考えていくことにしよう。提案するのは James Joyce (1882-1941) による傑作短編集 *Dubliners* に収められている “The Boarding House” である。

執筆されたのは1905年とかなり古い作品で、舞台は当時のアイルランドの首都ダブリンという、日本の受講生にとってはかなり距離感のある設定となっている。安全性はクリアしていると言えるだろう。古い作品ではあるが、今も流通している現代英語で書かれており、作品の長さも *Dubliners* 収録作品のなかでは短いストーリーの部類に入るもので、アマゾン社の Kindle 版でカウントしたところ2,794語だった。大学生であれば一気に読むことができる程

度の分量だろう。また、本作は日本の大学生向け英語教科書としても出版されている。“The Boarding House”は成美堂刊の『ダブリン市民』（菅沼慶一編注）や朝日出版社刊の『ダブリン市民』（安藤一郎・須藤壬章編注）に収録されており、それぞれ巻末には学習者用の詳しい注解が用意されているので、教室でも比較的題材にしやすい作品と言える。さらには、先に見た Hunter らの記事によれば、Joyce の *Dubliners* は、Dante の *Inferno* や Henry James の *The Beast in the Jungle* などと並んで、医学教育における文学教材として実効性が確認されている作品でもある (Hunter, et al. 789)。

“The Boarding House”が扱う主題は今風に言うところ「できちゃった婚」、英語では “shotgun marriage” の顛末である。その点では、もしもこれを中学校や高等学校において英語の語学教材としたら、何かと支障がありそうだ。しかし大学生が教員養成課程の教材として取り組むというのであれば、特に問題はない。いや、性交経験を持つ高校生の割合が男子の場合全体の13%を超えており、女子の場合は20%に迫っているという現状——日本性教育協会「青少年の性行動調査 第8回 (2017年)」<https://www.jase.faje.or.jp/jigyo/youth.html> のデータによる——を考慮するならば、高等学校の教壇に立とうという大学生にとっては、むしろ積極的に、共感的姿勢も持ちながら目を向けるべき題材とも言える。

本邦で目下のところ最新の *Dubliners* 研究書である『ジョイスの罨——「ダブリンナーズ」に嵌る方法』（金井嘉彦・吉川信編著、言叢社、2016年）には、各作品の論考の前に作品紹介が置かれている。この一部を借りて “The Boarding House” の内容をざっと見ておくことにしよう。

本作品は、ダブリンで下宿屋を営むムーニー夫人が、下宿人のボブ・ドーランを、娘のポリーと強制的に結婚させてしまう、その権謀術数に焦点を当てている。物語は、これら三人が、それぞれの視点から、ポリーとドーランの関係が進展していく過程を回顧するという三部構成になっている。

第一部では、ムーニー夫人が、娘の純潔が奪われたことに憤慨し、ドーランに結婚という「償い」を求める決意を固めている。第二部では、ドーランが、ポリーと結婚することに逡巡

しながら、世間体を気にかけ、職を失う可能性や、ポリーの兄ジャックから暴力を振るわれる危険性に恐れおののく。第三部では、直前までドーランの胸で「死んでしまいたい」と泣いていたポリーが、彼と母の面談が終わるのを何の不安もなく待っている。

[中略] そもそも、ムーニー夫人には、ポリーと下宿人たちを自由に交際させる意図があったし、ポリーとドーランの関係に気づいたあとも、彼女は、両者の態度に変化と動揺が見られるまで行動しなかった。つまり、ムーニー夫人は、二人が肉体関係を持つまで待ったのだ。[中略] このように「下宿屋」における強制結婚は、ムーニー夫人によって、用意周到に準備されていたのだ。(金井・吉川 160)

本作品の読解は、この作品紹介に見られるように、年頃の娘をかかえた下宿屋の経営者 Mrs Mooney の狡猾で不道德な策略と、その餌食となる哀れな独身男という構図に基づいて行われることが通例である。その読みの批評史は田多良俊樹の2016年の論考に詳しいが (161)、他に2004年と2008年に相次いで出版された *Dubliners* の新邦訳書 (順に結城英雄と米本義孝による訳) の訳者解説を見ても、状況は今も変わっていないことがわかる。米本などは自訳書の「訳注と解説」において、Mrs Mooney の「策略」や Polly が「ドーランを挑発して自己の思いを遂げ」、最後に「ああ、神様」とつぶやいてみせることで彼に「追い討ちを掛け」る様子を素描し、「一五編のなかに、一作くらい単純明快で喜劇的な作品があってもよいのではないか」とまとめているほどだ (米本 414-15)。田多良はさらに踏み込んで、「強制結婚の首謀者はポリーである」(田多良 163) とする議論を展開している。田多良によれば、その Polly は、当時の「晩婚化社会で若くして『おいしい』結婚を確保する」ためだけでなく、「女性の経済的自立につながるという点で有望な職業であったタイピストとしての [中略] 就労機会の喪失につながったムーニー夫人の判断ミスが繰り返されるのは回避するために [中略] 誘惑者として、強制結婚という陰謀に積極的かつ主体的に参与し、ムーニー夫人には出来事の背後で指示を与えていた」(175) という。

なるほど、一定の妥当性をもつ議論のように思われる。だが、Polly を首謀者あるいは積極的共犯者

とみなす解釈一辺倒の状況は、批評的健全さに若干欠ける観もあるし、さほど強固な足場を持っているわけでもない。「うまく結婚話がまとまったことを喜ぶ娘のポーリー」の内面が描き出されている(中尾24)などという批評を見ると、そんな様子が明記されていたっけと首をひねりたくなってしまう。

Polly を別様に理解する批評も、比較的少数派のようだがそれなりに存在する。Doran を磔刑のイエスとし Polly をマグダラのマリアとみる Bruce A. Rosenberg の解釈。Polly に、受胎告知を受けて「希望とヴィジョン」を恍惚と体験する聖母性のパロディを読みとろうとする Donald T. Torchiana の試み。Polly の知的発達レベルを疑問視することを提案する Margot Norris の読み。これらは、Polly を加害者とみなす読みに対し、彼女を状況の被害者と捉える可能性を指し示すものだ。こうした少数派の批評を追い風にして、本稿では“*The Boarding House*”の Polly を「共感的態度」から読むことを促してみたい。

Medical humanities 教育の一派である Health humanities 教育に携わる Michael Blackie と Delese Wear、Joseph Zarconi は共著論文“*Literacy beyond the Single Story*”において、医師や医学生が自分たちとは社会的・経済的境遇が大きく違う患者の話を書く際、患者の境遇について、一種の固定観念に基づいて勝手にストーリー——“what novelist Chimamanda Ngozi Adichie describes as dangerous ‘single stories’”(Blackie, et al. 362)——を作ってしまう、それが患者にケアを与えよときの障害となり得ることを示した。³⁾同様のことが教育者養成の場についても言えよう。ダブリン市内のちょっといかがわしい噂のある界隈に暮らす母子家庭、という境遇ばかりを見て、先入観に基づいた“single story”を確立してしまう前に、他の可能性があり得ることにもっと心を開いておく必要があるはずだ。つまり、教員が生徒の身の上を共感的に慮ろうとする際のアプローチ、生徒指導に当たって必要な条件として藤井が挙げている「共感的態度や尊重的态度」をとって試みるのが肝要で、そうした場合には、また違った景色や読み方も浮かび上がってくるだろう。

ただし、「共感的態度」からのアプローチを進める際、「この作品を共感的態度で読みなさい」などと単に言葉による指示に頼って強いるのは、あまり

褒められたことではない。知的関心あるいは審美面での効能を損ねるし、さらには、特定のアプローチを恣意的しかも“authoritarian”に強制することは、医学教育において文学が曖昧さを教える教材となる効能として Bleakley が挙げたうちの第2点の正反対の実践となってしまふ。それよりも、手がかりや糸口をそれとなく匂わせて導きながら、受講生に発見の体験(疑似体験)を味わわせるほうが得策だろう。そしてその手がかりや糸口は、もし可能なら、最初から高い精読力を要求するものではなく誰の目にも明白で単純な事実から別様の理解が広がる、という作品中要素が示せるならば、それこそ理想的だ。

“*The Boarding House*”の場合、作品の外形的部分に目付をして、その意味を考えるよう促す、ということからスタートしてはどうだろう。この物語は、内容面から考えれば、先に挙げた『*ジョイスの罫*』の作品紹介が述べているとおり、Mrs Mooney の部、Bob Doran の部、そして Polly Mooney の部という三部構成と捉えられる。しかし書記法が示す外形を見る限り、“*The Boarding House*”は二部構成なのである。短い物語でありながら、“*The Boarding House*”は複数の部に分かれる構成で書かれていて、それは、空白行あるいは間隔を開けた複数の点から成る行を置くことによって明確に示されている。具体的に言うと、母親と Doran が結婚話をまとめるまで Polly が自室でぼんやり過ごしている、その10数分間の様子を描く作品最後の10数行分が、それまでの文章とは区切られ、第2セクションとなっているのである。一方で、知略を巡らせる Mrs Mooney を描く部分と、「世間体を気にかけ〔中略〕恐れおののく」Doran の取り乱した様子を描く部分のあいだには、セクションの区切りはない。つまり外形上、Mrs Mooney の部と Doran の部は一緒くたに扱われていて、単一のセクションを構成しているのである。

学生の文学的素養や文学教育の経験値が高い場合なら、この、内容は三部構成で外形は二部構成という齟齬の意味を学生にそのまま考えさせてみるのもいい。それは、Ella Berthoud と Susan Elderkin の見事な読書案内 *The Novel Cure* にも通じる方法論、つまり、魅惑的な入り口だけを示して後は読者に任せるやり方だ。だが、学生の文学的習熟度に関する教師の判断によっては、もう少しだけ誘導を試

みてもいい。

たとえば、上で触れた外形上の特徴を示しつつ、次の問いを与えてはどうだろう。

- ・強制結婚という計略に母娘がふたりして携わり、独身男がそれに対して心の中で無駄な抵抗をする、という構図であれば、Mrs Mooney の部と Polly の部（あるいは順番は逆の方がいいかもしれない）をまとめて第1セクションとし、境界線を置いて Doran の部を続ける、という構成のほうがしっくりくるのではないか。
- ・しかし実際にはそうせずに、Mrs Mooney の部と Doran の部がひとつのセクションにまとめられていて、そこで境界を区切った上で Polly の部が置かれる、という構成が選択されている。
- ・Mrs Mooney と Doran をひとまとめにして Polly と対置することの根拠になる共通点が、ふたりの間にあるだろうか。

このように思考を進めさせていくと、たとえば、Mrs Mooney と Doran が、真剣勝負のゲームにおけるふたりのプレイヤーという共通項があるのに対し、Polly は自分の意思を持たせてもらえないゲームの駒にすぎない、という見方に行き当たる学生が出てくるかもしれない。そうなればそれを梃子にして、Polly のセクションを再読させ、そこに提示される彼女の思考の道筋が、計略を（首謀者としてにせよ、共謀者としてにせよ）知る者にしてはいかに曖昧模範としているか、という点に学生の注意を向けさせることもできよう。そして、その曖昧さが、Mrs Mooney の部において Mrs Mooney に近い視点から描かれる Polly の、“in wise innocence she had divined the intention of her mother’s tolerance” (Joyce 55) といった計算高さの印象や、Doran の部において彼に近い視点から描かれた Polly の加害者的印象 “he had a notion that he was being had” (57) とはずいぶん感触が異なっている、という気づきへ導くこともできるだろう。

Polly が身を置く状況は確かに、いかがわしい界限のいかがわしい家のいかがわしい娘、という先入観を読者に強いてくる。しかし、あえてそれに抗ってみると、強制結婚の積極的関与者という邪なイメージの代わりに、そこには、自分の意思を持たせてもらえず、気持ちに蓋をすることを無意識に行うようになって、その場その場で相手の意向を忖度し

て行動することが習性になってしまい、家庭環境とりわけ実の母親からの無言の圧力に従っていった結果、思いがけない妊娠という羽目に追い込まれ、それでも周囲が期待するような反応ばかりを演じてしまう——そんな被害女性の姿も見えてくる。あるいは、“Polly might be mentally and emotionally impaired in some way, and that her promiscuity is less a vice than either the pathology of a disturbed adolescent or the abused innocence of a mentally deficient girl” (Norris 164-65) とする Norris の示唆も、的を射ているかもしれない。

社会の空気や色眼鏡の圧力に安易に追従することなく、⁴⁾個人をひとりの人間として見る目を持ち、配慮すべき特異な事情がその人の境遇や背景に潜在している、という可能性に向けて常に自分を開いておく。それはおそらく、教師が生徒指導にあたる際の心得のひとつだ。そんな姿勢を教員志望者が習得するための教材として、“The Boarding House” のような文学作品は少なからぬ意義を持っているのではないか。

紙幅が尽きたのでここで擱筆し、上の作品解釈がまったくの曲解でもないことを論証する作業は別稿に譲ることにしたい。今後は、ここまで述べてきたことを土台に、英語文学作品を教員養成課程に導入するための基礎的事例研究を継続していく所存である。

【註】

*本研究は JSPS 科研費 JP20K00429 の助成を受けたものである。

- 1) Kathryn Montgomery Hunter, Rita Charon, and John L. Coulehan は、Pennsylvania State University College of Medicine が1972年に文学をカリキュラムのなかに正式に取り入れたのが最初の例だとする (Hunter, et al. 788)。
- 2) なお、1990年代半ば以降、文学と医療に関する教育の関心は、文学を読む活動から文学的テキストを医学生が書くという活動へ移りつつあるようだ (see Hunter, et al. 790, and Jones 422)。だが本稿は、日本における英語文学の活用という提案の趣旨を鑑み、読む活動に議論を限定することにする。
- 3) たとえば、アフリカ系米国人の患者を診る際に、“a single story of poor African Americans as uneducated, unsophisticated people whose ignorance would have to be overcome by a talented white physician” (Blackie, Wear, and Zarconi 164) を創作して自分でそれを信じ込む、というようなことである。

- 4) 昨今の新型コロナウイルス禍において、政治家の無思慮な公的言説によって「夜の街関連」というネガティブな集団がイメージ形成され、散布され、蔓延していったことを、ここで想起してもいい。

【引用文献】

- Arntfield, Shannon, and Kathryn Hynes. "Narrative Medicine in Postgraduate Medical Education: Practices, Principles, Paradoxes." *Health Humanities in Postgraduate Medical Education: A Handbook to the Heart of Medicine*, edited by Allan D. Peterkin and Anna Skorzevska, Oxford UP, 2018, pp. 41-78.
- Berthoud, Ella, and Susan Elderkin. *The Novel Cure: From Abandonment to Zestlessness: 751 Books to Cure What Ails You*. Penguin, 2013.
- Blackie, Michael, Delese Wear, and Joseph Zarconi. "Literacy beyond the Single Story: Teaching about Class in the Health Humanities." *Teaching Health Humanities*, edited by Olivia Banner, Nathan Carlin, and Thomas R. Cole, Oxford UP, 2019, pp. 158-72.
- Bleakley, Alan. *Medical Humanities and Medical Education: How the Medical Humanities Can Shape Better Doctors*. Routledge, 2016.
- Charon, Rita. "Literature and Medicine: Origins and Destinies." *Academic Medicine*, vol. 75, issue 1, January 2000, pp. 23-27.
- Crawford, Paul, Brian Brown, Charley Baker, Victoria Tischler, and Brian Abrams. *Health Humanities*, Palgrave Macmillan, 2015.
- Evans, Martyn. "Roles for Literature in Medical Education." *Mindreadings: Literature and Psychiatry*, edited by Femi Oyebode, RCPsych Publications, 2009, pp. 15-24.
- Evaristo, Bernardine. *Girl, Woman, Other: A Novel*. Black Cat (Globe Atlantic), 2019.
- Hester, Casey, Jerry B. Vannatta, and Ronald Schleifer. "Medical Professionalism: Using Literary Narrative to Explore and Evaluate Medical Professionalism." *New Directions in Literature and Medicine Studies*, edited by Stephanie M. Hilger, Palgrave Macmillan, 2017, pp. 99-116.
- Hunter, Kathryn Montgomery, Rita Charon, and John L. Coulehan. "The Study of Literature in Medical Education." *Academic Medicine*, vol. 70, no. 9, 1995, pp. 787-94.
- Jones, Anne Hudson. "Why Teach Literature and Medicine?: Answers from Three Decades." *Journal of Medical Humanities*, vol. 34, issue 4, 2013, pp. 415-28.
- Joyce, James. "The Boarding House." *James Joyce's Dubliners: An Annotated Edition*, edited by John Wyse Jackson and Bernard McGinley, Sinclair-Stevenson, 1993, pp. 53-59.
- Norris, Margot. "Narrative Bread Pudding: Joyce's 'The Boarding House'." *European Joyce Studies* vol. 7 (1997) pp. 143-66.
- Pentikäinen, Johanna. "The Use of Literature in Developing Multicultural Sensitivity in Teacher Training." *Procedia: Social and Behavioral Sciences*, no. 45, 2012, Proceedings of the 5th Intercultural Arts Education Conference, pp. 189-96.
- Torchiana, Donald T. *Backgrounds to Joyce's Dubliners*. Allen and Unwin, 1986, Routledge, 2016.
- Trittel, Monika, Mara Gerich, Bernhard Schmitz. "Training Prospective Teachers in Educational Diagnostics." *Teacher's Professional Development: Assessment, Training, and Learning*, edited by Sabine Krolak-schwerdt, Sabine Glock, and Matthias Bohmer, Sense Publishers, 2014, pp. 63-78.
- Whitehead, Anne. "The Medical Humanities: A Literary Perspective: Overview." *Medicine, Health and the Arts: Approaches to Medical Humanities*, edited by Victoria Bates, Alan Bleakley, and Sam Goodman, Routledge, 2014, pp. 107-27.
- 金井嘉彦・吉川信編著. 『ジョイスの罫一「ダブリナーズ」に嵌る方法』金井嘉彦・吉川信編著, 言叢社, 2016年.
- 田多良俊樹. 「ポリリー・ムーニー、あるいは謀略のタイピスト—『下宿屋』における大飢饉後の晩婚化社会と女性の就労」. 金井・吉川編著, pp. 161-78.
- 中尾真理. 「'A Painful Case' の内面描写—チエーホフ『犬を連れて来た奥さん』との比較—」. 『奈良大学紀要』第43号, 2015年, pp. 23-38.
- 梨木昭平. 「教職概論における『文学』の研究」. 『太成学院大学紀要』11巻, 2009年, pp. 261-74.
- . 「教職科目『生徒指導論』の臨床教育的意義に関する一考察—文学教材を活用した事例—」. 『臨床教育学論集』（武庫川臨床教育学会）第4号, 2010年, pp. 13-24.
- 藤井雅英. 「主体的な学びを活かす『生徒指導論』の展開」. 『園田学園女子大学論文集』第54号, 2020年, pp. 21-36.
- 丸川桂子. 「文学と英語教育」. 『リベラル・アーツ—札幌大学教育研究』第12号, 1995年, pp. 201-13.
- 山口健一. 「中学校現場に生きる生徒指導—『生徒・進路指導論』を通して教師を目指す学生に伝えたいこと」. 『敬愛大学研究論集』第92号, 2018年, pp. 49-81.
- 米本義孝. 「訳注と解説」. ジェイムズ・ジョイス『ダブリンの人びと』. 筑摩書房, 2008年, pp. 383-468.